

# 抗がん剤の話 広報げろ 2017.2

## 抗がん剤の話

わが国では一生の間に二人に一人ががんになるといわれる時代になりました。がんの治療はがんを取り除くことが基本で、手術、抗がん剤などの薬物療法、放射線治療、免疫療法などを組み合わせた治療が行われます。

手術や放射線治療が局所の治療であるのに対して、抗がん剤は転移があるときやその可能性があるとき、転移を予防するとき、白血病やリンパ腫など全身に効果が及ぶことを期待して使われます。

抗がん剤治療は多くの使用経験の蓄積、新薬の開発などにより標準的な治療のガイドラインも示されその効果が向上してきています。現在ではがんになれば多くの人が抗がん剤治療の恩恵を受けることができるようになってきました。

抗がん剤は手術後再発予防、手術だけでは取り切れないがんの治療、術前にがんの縮小を目指す治療、手術不能ながんの治療などに使われます。また抗がん剤は単独または効果を高めるために作用の異なる薬剤を組み合わせられて使われます。

抗がん剤は怖いというイメージもあります。それはその副作用によるところが大きいと思われれます。抗がん剤による副作用には脱毛、口内炎、吐き気、嘔吐、食欲不振、下痢などの胃腸障害、皮膚の変化、手足のしびれ、心機能異常、骨髄抑制（白血球や血小板減少）、肝障害、腎障害などがあります。これは抗がん剤が、がん細胞の増殖を抑えるのと同じように、毛根細胞や胃腸の粘膜細胞、造血細胞などの、活発に消失、再生を繰り返している臓器細胞の増殖もおさえてしまうからと考えれば理解できるでしょう。

抗がん剤の副作用によって二度とその治療を受けたくないという患者もいるため、現在では様々な薬剤を使いこの副作用を抑えています。また治療を受ける人には主治医からよく説明を受け副作用の対処法を学んでいただきます。

多くの抗がん剤は一週間から三週間の間をおいて静脈注射で投与されるため初回はその作用を観察するために一日から二日の入院となります。経過良好であれば以後は通院で三カ月から一年間程度の治療となります。

抗がん剤治療はがんとの戦いです。そのためには自分のがんがどのようなものかを知ることが大切です。治療は主治医任せにしないで自分で決めることがその後の治療に積極的に立ち向かえることとなります。

治療中は様々な体調変化で病院に急な受診が必要になることもあります。金山病院では岐大病院腫瘍外科と連携し、抗がん剤治療にも力を入れ皆さんのがん治療を支える身近な病院として努力しています。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦